

5月度学術講演会

日 時	5月18日(土) 午後2時
演 題	嚥下造影検査の意義について ～脳血管障害、パーキンソン病を中心に～
講 師	社会医療法人 寿会 富永病院 内科・リハビリテーション科 陶山 昭彦 先生
出席者数	32名
担 当	富永良子
共 催	大塚製薬 株式会社
情報提供	新規酸分泌抑制剤 タケキャブ錠について

1) 自分の口から安全に食べる 施設入居者の食事摂取を介助しているスタッフから、外泊時に本人が望む食事を食べさせてしまいむせ返って発熱することがよくあり、家人へ医師より指導を求められる場面に遭遇する。食材形態や摂取体位など、ST(言語聴覚士)や管理栄養士を含めた嚥下サポートチームの必要性を痛感する。富永病院は2014年回復期リハビリテーション病棟をたちあげ、医師・看護師・リハビリスタッフ・管理栄養士・ソーシャルワーカーによる生活期復帰を支援するチームリハビリの豊富な経験を有している。今年度より外来においても、医療機関からの嚥下機能評価の依頼をうけて嚥下造影機能検査(Video Fluorography、VF)を行うようになった。

2) 嚥下造影機能検査とは 嚥下障害診療ガイドライン2018で数ある嚥下機能検査の中で最も信頼性の高い検査と位置づけられている。口腔・咽頭・食道の経路の嚥下障害の原因を透視下でリアルタイムに観察し評価できる。造影検査のため、同意書を取得し

言語聴覚士2名が事前に管理栄養士と事前情報にもとづき食材を用意し、医師・看護師・診療放射線技師がチームで透視造影検査室で約1時間程度の綿密で慎重な検査を行っている。疾患の主体は脳血管疾患やパーキンソン病だが、依頼に応じて様々な病態の嚥下障害の患者の評価を行なっている。検査の動画はサーバーに記録され電子カルテから閲覧可能で、即日患者・家人に説明を行っている。また、検査結果は言語聴覚士の評価をふまえた担当医師の診療情報提供書で依頼いただいた先生にCD-Rとともにお返ししている。

3) 嚥下障害治療 病態に応じて、嚥下リハビリテーション、嚥下調整食、薬物治療の3つのアプローチがあり、患者ごとに嚥下障害にもっとも適切な治療方針をたてて、助言をおこなっている。嚥下リハビリテーションについては介護保険による通所・訪問リハビリスタッフへ充実したリハビリテーション部スタッフから情報提供を実施しており、外来において管理栄養士による嚥下調整食の細やかな食事指導を行っている。薬物治療は、嚥下障害診療ガイドライン、脳卒中治療ガイドライン、パーキンソン病ガイドラインなど種々の推奨薬物が示されており、病態に応じて投薬可能な薬物治療の選択を行って助言させていただいている。

4) まとめ 高齢化がすすみ在宅診療、施設訪問診療など実地医家がクリニックに来診できない患者にもかかわる場面がますます多くなってきた。次第にADLが低下し、自分の口で摂取する機能が低下した病態を示す患者に対して、どのように嚥下機能の評価し、適切な治療をおこなっていけばいいか苦勞されている先生方の一助になればと考え、富永病院での外来での嚥下造影機能検査を開始した次第である。検査実施の評価だけでなく、検査評価をふまえた治療戦略などリハビリテーションチームがご支援できることがあればと思っている。嚥下障害サポートチームにお気軽にご相談いただければ幸甚である。